

日本ナイル・エチオピア学会  
第 32 回学術大会プログラム・要旨集

The 32nd Annual Conference of the Japan Association  
for Nilo-Ethiopian Studies

Program and Abstracts



主催 日本ナイル・エチオピア学会  
(Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies)  
共催 大阪公立大学・大阪公立大学女性学研究センター  
(Osaka Metropolitan University, Center for Women's Studies)  
日時 2023 年 4 月 15・16 日(土・日)



第 32回日本ナイル・エチオピア学会学術大会  
全体スケジュール／Overall Agenda

【4 月 14 日 金曜日】 運営幹事会

17:00～19:00 運営幹事会 Secretariat meeting

【4 月 15 日 土曜日】 公開シンポジウム・評議員会

11:30～12:30 評議員会 The Board of Trustees meeting

14:00～17:30 公開シンポジウム Public Symposium

【4 月 16 日 日曜日】 研究発表・総会 Presentations, The General Assembly

9:00～9:20 接続確認 connection check

9:20～9:30 会長挨拶 opening remarks

9:30～12:05 研究発表(第1・2セッション) 1st & 2nd session for presentation

12:05～13:00 昼休み lunch break

13:00～13:50 総会 General Assembly

13:50～14:20 高島賞授与式 Takashima Prize Award Ceremony

14:30～15:30 研究発表(第3セッション) 3rd session for presentation

15:40～15:45 最優秀賞発表授与式 Best Presentation Award Ceremony

15:45～15:50 閉会挨拶 closing remarks

## オンライン参加者用マニュアル

本学術大会は、対面参加とオンライン参加のハイブリッドで行います。オンライン参加をされる方は、下記の点にご注意ください。

### 【注意点】

1. 配信映像の録画録音（画面キャプチャを含む）は絶対に行わないでください。
2. 発表者は、学会員にのみプレゼンテーションをすることを想定していますので、接続先 URL を第三者に知らせないでください。

### 【参加の仕方】

1. Zoom 会議の設定は、実行委員会が行います。Zoomの会場入室 URL（以下、入室用 URL）については、参加者に大会前にメール送付します。大会当日は、入室用 URL をクリックしてご参加ください。
2. Zoom を初めて利用する場合はアプリケーションのインストールが必要です。起動後「コンピューターでオーディオに参加」を選んでください。
3. オンライン発表の方は、必ず事前に接続チェックをしてください。
4. 質疑は発表終了後に時間を設けます。発表の最中に「チャット」をしないでください。質疑などで発言したいときは、「参加者」の「手を挙げる」機能で意思表示してください。座長の指示に従って、マイクのミュートを解除し、必要に応じて所属と名前を名乗ってから発言してください（映像ON、音声ミュートがデフォルトです）。発言終了後は再度ミュートにしてください。

### 【発表の仕方】

1. Zoom への参加の前に、あらかじめ、ご自分のパソコンにパワーポイントのスライドを開いておいてください。
2. Zoom に参加し、座長の指示があったら、発表者は音声ミュートを自分で解除します。Zoom の「画面を共有」でパワーポイントのスライドを選択します。
3. 通常のパワーポイント機能を使って発表してください。
4. 一人あたりの発表時間は 20分+質疑応答5分です。発表開始15 分になりましたら、座長がベル 1 回、発表開始 20 分になりましたらベル 2 回でお知らせします。質疑応答の時間確保のため、発表は 20 分以内におさめてください。発表が終わりましたら、「共有の停止」ボタンを押し、音声をミュートにしてください。

**【質疑応答の仕方】**

1. 座長が「これから質疑応答に入ります」と述べたら、挙手をしてください。
2. 挙手の仕方は、画面下に表示されるメニューの「参加者」をクリックすると表示される「手を挙げる」から行なってください。
3. 座長が「●●さん、どうぞ」と言ったら、音声ミュートが解除されていることを確認して、発言してください。
4. 発表時間が開始後 25分となりましたら、座長が質疑応答の終了を告げます。

### A Guide for Participants

The 32<sup>nd</sup> Annual Conference of JANES is held by hybrid method. The followings are the cautions for the participants who join the Conference by online.

#### 【Cautions】

1. Do NOT RECORD voices or slides presented in the Conference.
2. Do NOT INFORM the connection URL to anybody outside the JANES membership.

#### 【How to join the Zoom conference】

1. The organizing committee will inform the connection URL to the participants beforehand. The participants can join the conference by clicking the URL.
2. Previous installing of the latest version of Zoom application is necessary.
3. Presenters are requested to check the internet connection beforehand.
4. Questions and comments should be made after each presentation, according to instructions given by the chairperson. Please do not make comments using the 'chat' function during the presentation. Those who have questions or comments are requested to use 'raise hand' function, after the presentation. Unmute while speaking and mute when finished.

#### 【How to make presentation】

1. Open your (PowerPoint) slide before you join Zoom meeting.
2. When your turn comes, unmute and begin your presentation, using 'share screen' function.
3. Give your presentation as usual.
4. A presentation should finish within 20 minutes with Q&A session for 5minutes. Chairperson will inform you when 15 minutes pass by ringing the bell once, and twice when 20 minutes pass. Please keep your presentation within 20 minutes to secure time for questions and comments. Click 'share screen' button to end screen sharing and click on mute.

#### 【How to make questions and comments】

1. When chairperson says 'Now, we accept questions or comments,' use 'raise hand' function to indicate your intentions to make questions or comments.
2. When chairperson invites you to make your remark, make sure to unmute, and speak.
3. When time reaches the limit of 25 minutes, chairperson will announce the ending, and invite the next presenter.

個人発表のみなさまへ

For Presenters

口頭発表の時間は 25 分です。

内訳は発表 20 分、質疑応答 5 分となります。タイムキーパーは、次のようにベルを鳴らします。

15 分経過：ベル 1 回 予鈴

20 分経過：ベル 2 回 発表終了

25 分経過：ベル 3 回 質疑応答終了

The oral presentation time is 25 minutes.

The breakdown is 20 minutes for presentation and 5 minutes for Q & A. The timekeeper rings the bell as follows:

15 minutes passed: 1st bell

20 minutes passed: 2-time bell to end the presentation

25 minutes passed: 3-time bell to end Q & A ended

The 32nd Annual Conference of the Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies  
15-16 April 2023, Osaka Metropolitan University



【プログラム】

4月15日(土) 14:00～17:30 Public Symposium

公開シンポジウム

「女性兵士が問いかける地平—エチオピア、ルワンダ、ソ連、ウクライナの事例から」

---

14:00- 14:10 開会の挨拶

日本ナイル・エチオピア学会会長

14:10- 14:20 趣旨および背景説明

内藤葉子 (大阪公立大学女性学研究センター主任)

---

14:20- 16:40 講演

---

14:20-15:00

橋本信子 (大阪経済大学)

「女性が兵士になるとき—ソ連、ウクライナの事例」

---

15:00-15:40

眞城百華 (上智大学)

「エチオピア・ティグライにおける女性兵士の経験—戦時下の女性解放と戦後への架橋」

---

15:50-16:30

近藤有希子 (愛媛大学)

「彼女たちの戦線—ルワンダ丘陵をめぐる危機的日常生活と女性兵士という選択」

---

16:30-16:40

秋林こずえ (同志社大学)

コメント

---

16:40-17:00 休憩／質問集計

---

17:00- 17:30 質疑応答

4月16日(日) 9:00-15:50

研究発表 Presentation

---

9:00-9:20 接続確認 connection check

---

9:20-9:30 会長挨拶 opening remarks

---

【第一セッション 1st session 9:30-10:25】

---

9:30-9:55 ①島津侑希「エチオピアにおける産業人材の非認知的能力の育成ーアディスアベバ市内の縫製工場従業員を事例としてー」(Yuki Shimazu, “Development of Non-cognitive Skills of Industrial Human Resources in Ethiopia: A Case of Garment Factory Workers in Addis Ababa”)

---

10:00-10:25 ②田中利和、カッバラレグゲサ「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究⑦ー縫い付け地下足袋の研究と事業構想」(Toshikazu Tanaka, Kebere Legesse, “Engaged Area Studies to Creating Ethio-Tabi⑦: Research and Business Design for Sewn Jika-Tabi”)

---

10:25-10:40 休憩 (15分) break

---

【第二セッション 2nd session 10:40-12:05】

---

10:40-11:05 ③石川博樹「『メネン皇后学校料理書』とエチオピア北部における副食の歴史的变化」(Hiroki Ishikawa, “Study on The Empress Menan School Cook Book and Historical Changes in Side Dishes of Northern Ethiopia”)

---

11:10-11:35 ④田中綾華「エチオピア西南部アリ地域における気鳴楽器と演奏集団」(Ayaka Tanaka “The Aerophone and Music Performance Group among the Aari, Southwestern Ethiopia”)

---

11:40-12:05 ⑤川瀬慈「映画上映『吟遊詩人ー声の饗宴ー』」(Itsushi Kawase, Film Screening "Bards: A Banquet of Voices")

---

12:05-13:00 昼休み (55分) Lunch break

---

13:00-13:50 総会 General Assembly

---

13:50-14:20 高島賞授与式、受賞者講演 Takashima Prize Award Ceremony

---

14:20-14:30 休憩 (10分) break

---

**【第三セッション 3rd session 14:30-15:30】**

---

14:30-14:55 ⑥ Rumi Okazaki, Ikuro Shimizu, Tadesse Girmay, Fasil Giorghis, Eisuke Shoji, Kentaro Nishiyama, Kei Misumi, Taiga Takehara, “Tracing the Original Urbanscape of Addis Ababa: Case of Armenian Sefer”

---

15:00-15:25 ⑦ 石原美奈子 「エチオピア都市における宗教空間の力学に関する一考察—ジンマ市の事例から—」 (Minako Ishihara, “A Preliminary Study on Dynamics of Religious Space in Urban Ethiopia: A Case Study of Jimma City”)

---

---

15:30-15:40 発表最優秀賞投票・集計 break

---

15:40-15:45 発表最優秀賞授与式 Best Presentation Award Ceremony

---

15:45-15:50 閉会挨拶 Closing remarks

---



4月15日（土）

公開シンポジウム

「女性兵士が問いかける地平  
ーエチオピア、ルワンダ、ソ連、  
ウクライナの事例からー」

要旨



女性が兵士になるとき —ソ連、ウクライナの事例  
橋本信子（大阪経済大学）

**Female Soldiers in USSR and Ukraine**  
**Nobuko Hashimoto (Osaka University of Economics)**

2022年2月、ロシアによるウクライナへの全面侵攻が始まって以降、主要メディアやSNS等で、戦闘や爆撃によって破壊された街の様子や国内外へ避難するウクライナ市民の様子が連日流れている。それとともに武装したウクライナ人女性の姿を目にすることも多い。実は、2021年末時点で既にウクライナでは、軍人の約22%を女性が占めており、ヨーロッパでもっとも女性兵士の割合が高い国の一つとなっていた。

男性の「職場」とされてきた戦場に女性が大量に現れたのは、ウクライナもその構成国であった第二次世界大戦時のソ連においてである。ソ連では約80万人にのぼる女性たちが軍隊やパルチザン（非正規軍）に加入したといわれる。当初、女性は徴兵の対象ではなかったので、彼女らの多くは志願兵であった。しかし彼女らは戦場において、また戦後の社会において、さまざまな困難に直面した。戦闘によって心身に傷を負ったのみならず、セクシャルハラスメントや差別に遭うこともしばしばであった。元女性兵士は性的に乱れているという偏見をもたれることも多く、英雄やアイコン的存在として称賛された一部の著名な女性を除けば、多くの元女性兵士たちは、戦後は沈黙せざるをえなかった。さらに戦後のソ連においては、人口増加をはかっていたので出産が奨励され、女性には産む性としての役割が強く求められた。そうした社会においては、男性の帰還兵が祖国防衛の英雄として尊敬を集めたのに対して、女性たちの功績が称えられることはまれであった。元女性兵士たちが生々しい体験を語るようになるのは、1980年代後半のペレストロイカ期以降のことである。

さて、ウクライナは1991年末に独立する。民族主義は標榜しなかったものの、脱露入欧の方針はロシアとの緊張とウクライナ政界内における対立を生み、不安定な社会・経済・政治状況が続いた。2013年末には政権に対して広範な層の市民による抗議運動が起こった。抗議には女性も大挙して参加し、男女の割合はほぼ半々であったという。運動は親露派大統領がロシアに逃亡することで終結するが（マイダン革命）、ロシアはその機に乗じてウクライナ領のクリミア半島を併合し、さらにはウクライナ東部の分離主義者（親露派）を支援して武力紛争に発展させた。このときにウクライナの女性たちは再び国軍や民間防衛組織へ参加するようになる。軍は女性の登用には消極的であったが、志願兵らとその支援者らは、女性兵士の処遇をめぐってロビー活動を繰り広げる。その結果、軍における女性の職種の拡大や、そのための規制撤廃が行われていく。今日の同国における女性兵士の多さは、第二次世界大戦から連続していたわけではなく、また2022年に突如始まったわけでもなく、2013-14年の政変が大きな転機になったのである。

ところで女性兵士のための環境整備は、ウクライナのジェンダー問題に関心をもつ研究者等には肯定的にとらえられる傾向にある。理由は、それが家父長制的な意識が残るウクライナ社会におけるジェンダー平等化の一事例として、また紛争の予防および解決、平和構築における女性の関与を拡大するという世界的な動向に合致するものとして意味づけられるからである。しかしそういう評価に対しては、報告者は慎重であるべきだと考える。

エチオピア・ティグライにおける女性兵士の経験—戦時下の女性解放と戦後への架橋  
眞城百華（上智大学）

**The Experience of Women Soldiers in Tigray, Ethiopia: Bridging the  
Wartime Women's Liberation Policy to the Post-War Period**  
Momoka Maki (Sophia University)

本報告では、エチオピア北部で70年代半ばから展開された内戦にゲリラ兵として参加した女性兵士を取り上げる。「紛争と女性」が議論される際に、紛争の犠牲者や被害者となった女性に注目が集まるが、アフリカにおける紛争では政治や社会を変革するために志願して兵士となった女性が独立運動や複数の紛争において多数存在する。エチオピア北部のティグライ州で女性兵士たちが所属したのは1974年に成立した軍事政権に挑戦したティグライ人民解放戦線（TPLF）であった。1975年から1991年まで16年間継続した内戦では約2万人の女性がゲリラ兵士として志願して参加した。1991年の内戦終結時にはTPLFの約3分の1が女性兵士であった。

兵士となった女性たちの多くは農村出身であり、戦前も家父長制の強い影響下にあった。女性は村の会合への参加が認められなかっただけでなく、婚姻など女性たちの人生にかかわることも家族や夫によって決定された。こうした農村の女性兵士たちが兵士に志願した動機、戦場での経験、また戦後の貢献や諸課題についてとりあげ、エチオピアの女性兵士の経験を通じて女性が兵士となることがティグライの文脈ではどのような意味を持ったのか、女性たちが兵士となった経験をもとにどのようにエージェンシーを行使してきたのか、を考察したい。

TPLFに多くの女性が兵士として参加した背景にはTPLFの女性政策がある。TPLFは設立当初から女性知識人が幹部として参加し女性政策の導入を働きかけた結果、戦時下で当時反政府勢力だった武装組織によって女性解放のための諸政策が実施された。内戦下で農村女性は政府軍による攻撃や戦時性暴力にさらされ、戦時下で受けた被害や犠牲も甚大であった。他方で、TPLFにより組織化された女性組合を通じて農村女性が生存や防衛、紛争支援に果たした役割も大きい。戦時下で農村女性は、初めて村やTPLFの会合に参加し自身の意見を表明する機会を得るなど政治参加を果たし、土地を配分され、教育を受ける機会も得た。一連の農村における女性解放政策は、女性兵士の志願の動機の一つとなった。女性兵士は部隊において男性兵士と同等の任務を担った。一部の女性兵士はその能力が認められ、男性兵士を従える部隊長となった。戦場という過酷な環境で、ジェンダーにかかわらず兵士として同等に扱われた経験が特に強調して語られる。

1991年の内戦終結後に、男性兵士は国軍再編が許可されたのに対して、女性兵士は除隊を余儀なくされた。同じ部隊で戦った兵士であってもジェンダーにより戦後の経験は異なる。戦中の女性解放政策も継承されたが、他方で戦後の農村女性や女性兵士は揺り戻す家父長制の影響も色濃く受けている。戦後のティグライ州政府議会では女性議員が半数を占め政治領域における女性の躍進が顕著となったが、農村では家父長制の影響が再び色濃くなった。元女性兵士や農村女性たちは女性組合を結成して、戦後も女性の課題に取り組みジェンダー平等を達成するための不断の努力を続けている。戦中から戦後にかけて農村女性や女性兵士が家父長制やジェンダー規範をどのように乗り越え、またそれらによる制限を受けつつ社会や政治を変革しようとしたのか、ティグライ女性のエージェンシーに着目して取り上げる。



彼女たちの戦線—ルワンダ丘陵をめぐる危機的日常生活と女性兵士という選択  
近藤有希子（愛媛大学）

**Women's Battle Front:  
Daily Life in Crisis and the Choice of Female Soldiers in the Rwandan Hills**  
Yukiko Kondo (Ehime University)

ルワンダ共和国では1990年に深刻な紛争が発生し、1994年には多数派のフトゥ（Hutu）のエリート層や「暴漢」集団による、少数派のトゥチ（Tutsi）やフトゥ穏健派への虐殺を経験した。本発表では、ルワンダの女性たちが軍隊に参加するという実践に関して、1990年代の紛争時、および戦後の社会状況のなかで、それが周囲との交渉や調整を通していかに選び取られようとしているのかを明らかにする。極めて困難な状況では女性も軍人になる、というルワンダ語の民話が存在するが、とくに紛争時の反政府勢力、そして戦後の国軍に志願するという選択が、女性たちにそれぞれいかなるものとして経験されているのかについて、軍隊内における女性の位置づけや彼女たちをとりまく社会環境に着目しながら概観する。

1990年代の紛争の引き金のひとつは、当時の反政府武装勢力ルワンダ愛国戦線（Rwandan Patriotic Front: RPF）が、長年の難民生活の苦境のなかでルワンダへの帰還を掲げて運動を開始したことにある。RPFはルワンダにおける1959年からの「社会革命」の際に、おもに隣国ウガンダに難民化したトゥチの第二世代によって構成される。かれらは周辺諸国に難民化していたルワンダ人を束ねるために、ルワンダ人であることを唯一の条件に多様な人材を取り込んだ。フトゥや女性も例外ではなかった。入隊した女性の大部分は自発的に参加し、彼女たちの多くがだれにも知られないように秘密裏に活動していたとされる。

軍事的な勝利を果たしたRPFは、戦後国軍として再編した。そして昨今の軍隊への志願という選択は、土地も雇用も存在しない現状のルワンダ丘陵の危機的な状況に留まることを拒否して、まとまった現金を得るためになされる傾向にある。不安定な若者の受け皿となっている現在のルワンダ国軍は、実力主義を掲げて、エスニシティの差異に関係なく、昇進の機会があることが謳われているばかりか、世界的な潮流を受けて女性が積極的に登用の対象にもなっている。

たしかに1994年の虐殺後、現在のルワンダ社会では、エスニシティやジェンダーに関わる意欲的な取り組みがなされてきた。実際、現政権RPFは、1994年の虐殺後、国家の統合と和解を目指して従来存在してきたエスニシティを否定し、また男女間格差の是正に向けて国際的に注目される変革をおこなっている。しかし他方で、権力のトゥチ化が深化していることや、従来のジェンダー規範や構造的な差別が持続していることも指摘されてきた。

軍隊への志願という女性たちの選択には、家族や親族をはじめとする親しいものたちからの、理解だけでなく拒絶をも伴う。「国を守る仕事」として尊重されることもあれば、「女の子なのに」と地域の多数が反対することもある。また、「従順な女性」であり続けることや、他方で「稼ぐ能力のある魅力的な女性」になることなどの、現在のルワンダで女性として生きることへの葛藤が垣間見える。多層の想いに支えられた彼女たちの選択とそれに伴う逡巡や葛藤は、各時代における「若者」という世代のあり方とともに、エスニシティやジェンダーの差異が交差する地点で生じている出来事である。



4 月 16 日 (日)

日本ナイル・エチオピア学会

研究発表要旨



エチオピアにおける産業人材の非認知的能力の育成  
—アディスアベバ市内の縫製工場従業員を事例として—  
島津侑希（愛知淑徳大学）

**Development of Non-cognitive Skills of Industrial Human Resources in Ethiopia:  
A Case of Garment Factory Workers in Addis Ababa**  
Yuki Shimazu (Aichi Shukutoku University)

本報告は、エチオピアにおける産業人材の技能形成について、特に非認知的能力の育成に焦点を当てる。産業人材が労働市場から必要とされるためには、働くための基礎的な能力を身に付けていることが前提となる。この「基礎的な能力」は、大きく3つに分類することができ、①認知的能力（読解力、計算力など）、②作業的能力（特定の職業に必要な技能）、③非認知的能力（問題を解決するために自身の知識や技術を当てはめる力、仕事上の対人関係を築く力、ルールの順守や判断などを行う力など）となる。近年、その中の「非認知的能力」が注目を集めており、各国の教育目標に取り入れられるなど、広がりを見せている。しかし非認知的能力の評価方法や育成方法については、その意味の多義性や曖昧さ故に数値化・体系化することが難しく、困難を抱える傾向にある。

エチオピア政府は服飾産業を経済発展のための重点分野と位置付けており、特に海外への輸出増加を目指している。成長の背景には、近年エチオピア政府が力を入れている外資企業誘致が大きな役割を果たしている。同国では既に7か所の工業団地が稼働しており、多くの服飾関係の外資企業が入居し始めている。今後も縫製工場を中心に入居が進む予定であるため、同産業ではさらに外資企業の果たす役割が大きくなると予想できる。しかし、エチオピアの服飾産業は未だ初期の発展段階にあるため、大規模な工場はまだ少なく、工場で働いた経験のない農村出身者を労働者として新規採用している場合が多い。そのため、労働者が製造現場に必要なマインドセットを欠いている割合が高く、生産性向上を妨げる大きな障害として問題視されている（PSI & GRIPS, 2020）。よって、縫製工場従業員の非認知的能力の育成は、エチオピアの今後の経済発展のためにも重要であると考えられる。

本報告では、エチオピア政府が運営する公立の職業技術教育・訓練校（以下、TVET校）で、どのような方法で非認知的能力の育成が試みられているか、また、どのような課題を抱えているかについて、学習指導要領および教材の分析を通して明らかにする。加えて、報告者がメンバーとして参加している名古屋大学の Skills and Knowledge for Youth プロジェクト（SKYプロジェクト）で、JICAの草の根支援型事業「中小企業労働者の能力強化に向けた技能評価に基づく訓練導入」として、現地中小縫製工場従業員の非認知的能力の向上のために実施したトレーニング結果についても分析する。本トレーニングはエチオピアの Kaizen Excellence Center（KEC）との協働の下、2022年11月にアディスアベバ市内で実施したものである。トレーニングはボードゲーム形式で実施し21企業から約250名が参加した。

<参考文献>

PSI, and GRIPS. (2020). Ethiopia Productivity Report. Policy Study Institute (PSI) and National Graduate Institute for Policy Studies (GRIPS).

## **Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑦**

### **縫い付け地下足袋の研究と事業構想**

田中利和（事業構想大学院大学）、カッバラレッグサ（ウォリソレザー）

## **Engaged Area Studies to Creating Ethio-Tabi⑦ :**

### **Research and Business Design for Sewn Jika-Tabi**

**Toshikazu Tanaka (Graduate School of Project Design), Kebere Legesse (Woliso Leather)**

「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究」は、エチオピア産地下足袋 (Ethio-Tabi=エチオタビ) の研究、開発、普及、芸術、事業をめぐる、多様な人びとがともにフィールドワークをおこなってきた。このとりくみは、多彩なフィールドが共鳴することにより、ユニークな超学際研究とエチオタビ文化を創生していくことを目的としている。エチオタビにまつわる一連の試みを動的に記録、分析することによって、創造性の特質、醍醐味について探究し、未来につづく多様なかたちについて、描きだすことを目指している。

本発表では、これまでのオロミヤ州南西ショワ県ウォリソにおける皮革職人で起業家のカッバラとのエチオタビ製作をふりかえり、1.納期の遅延といった経営的課題、2.エチオタビのアウトソールの離脱といった技術的課題について検討する。そのうえで、3年ぶりにおこなった、2023年2月5日から2023年2月24日までの20日間のフィールドワークの成果を報告する。

経営の改善に関しては、3年前に納品に関するマネジメントを依頼した、現地起業家とともに注文をした104足のエチオタビを確認した。完成までのプロセスに、さまざまなトラブルが生じており、このような経営に係る問題に、柔軟に対等するためには、発表者がみずから現場で対面によって調整することの重要性を再確認した。

生産の改善に関しては、とある農民が、3年前に提供した試作品の「貼り付け」のエチオタビを、自ら「縫い付け」を施し、耐久性と利便性を高めたという情報を得た。さらにその農民は、生活のなかで、広く知人のものにも縫い付けを施していたという話を聞くことができた。

以上をふまえて、発表者の20日のフィールドワーク期間で完成可能な納品数と、縫い付けエチオタビの質の向上の生産に関して、カッバラとエチオタビの試用人となる農民を交えて議論をした。その結果、まずは10日で、既製の縫い付け履物の研究を重ね、耐久性の高い革製12足と布製4足の合計16足の縫い付けエチオタビの制作を目指すこととした。縫い付けに適したアウトソールの素材の調達や、製作技術にともなうデザイン変更にまつわる研究はあらたな挑戦となった。縫い付けの実施は、紆余曲折を経て、ある1人の街のリストロ（靴磨き職人）の協力を得られ、目標の10日で16足の縫い付け式のエチオタビの製作に成功した。さらに残りの10日間で、あらたなデザインを加える形でカッバラを中心にさらに16足の製作を目指した。10日後、目標の16足はさらに高い品質で完成し、最終的には20日で、32足全て手製の縫い付けエチオタビの生産に成功した。

エチオタビの完成品をカッバラとともに、発表者の調査村で披露をした。農民からデザインと縫い付けに関しては高い評価を得た。また、今後のエチオタビにまつわる研究と事業、あらたな表現可能性について、農民と議論をおこなった。縫い付けエチオタビの事業化に向けて、多様な人びととの歩みをすすめるために、エチオタビにまつわる芸術面からの実践的な検討を計画している。最後に来年度の本学術大会の発表計画「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑧」の構想について述べる。

『メネン皇后学校料理書』とエチオピア北部における副食の歴史的变化  
石川博樹（東京外国語大学）

**Study on *The Empress Menan School Cook Book* and Historical Changes in Side Dishes  
of Northern Ethiopia**

**Hiroki Ishikawa (Tokyo University of Foreign Studies)**

イネ科の穀類テフ (*Eragrostis tef*) を主な原料とする酸味のあるパンケーキ状のインジェラ (*injera*) とトウガラシをふんだんに用いた煮込み料理であるワット (*watt*) はエチオピア北部の食文化を代表する食品とされる。ワットと並んで煮込み料理のカテゴリーとして重要なのが、トウガラシを加えない「アリチャ (*allacha*)」である (Selinus 1971; 上村 2023)。ワット、アリチャともに豆類が多用され、それらを含めた各種の豆類の煮込み料理はエチオピア北部の食文化において重要な地位を占めている。

発表者はエチオピア北部の食文化の歴史的变化に関する研究を行い、1840年代にエチオピア北部に滞在した英国人 M. Parkyns の著書 (Parkyns 1852) などを史料として、①1750年代までにテフが主食穀類となったこと、②1770年代初頭までにインジェラの原型と思われる食品が成立したものの、1840年代に至っても現在のインジェラの調理法が確立していなかったことなどを明らかにした (石川 2021)。また1840年代までに各種のトウガラシ調味料が多用されるようになっていたことも確認した。これらの研究を進める中で判明したのは、1840年代までの各種史料にアリチャと呼ばれる料理への言及が見られないこと、また豆類の煮込み料理が主たる副食であったことを示す記述を確認できないことであった。つまり現在見られるエチオピア北部の副食の特色は1850年代以降に形成された可能性が高い。

20世紀半ばに出版された『メネン皇后学校料理書 (*Yä-gərmawit ätege mänan tāmhart bet yä-məgb assärar mäshäf*)』はハイレ・セラシエ1世 (在位1930~1974年) の后であったメネン皇后 (1889~1962年) によって設立された女子校の生徒が書きためたレシピをアムハラ語と英語で記録したものである。次頁に示したとおり、本書に掲載されたレシピは「エチオピア料理」と「ヨーロッパ料理」に大別される。「エチオピア料理」88項目のうち15項目がアリチャで、豆を主体とするレシピは36項目に及び、現在見られるエチオピア北部の副食の特色は、本書編纂時に概ね成立していたと考えられる。

本発表では、19世紀半ばから20世紀半ばまでを対象とし、ヨーロッパ人のエチオピア滞在記やヨーロッパ諸国で編纂されたアムハラ語辞典を主な史料として、アリチャという語がトウガラシを用いない煮込み料理を意味するようになった時期の解明とこの期間における豆類利用の変化の検証を行う。これらの作業を通じて、エチオピア北部において現在見られる副食の特色が成立した時期を考察する。

引用文献

- 石川博樹 (2021) 「16~18世紀のエチオピア北部におけるテフの消費拡大とインジェラの成立」  
『農耕の技術と文化』30: 1-35.
- 上村知春 (2023) 『恵みありて、インジェラに集う：エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌』春風社.
- Parkyns, M. (1853) *Life in Abyssinia: Being Notes Collected during Three Years' Residence and Travels in that Country*, London: John Murray.
- Selinus, R. (1971) *Traditional Foods in Central Ethiopian Highlands*, Uppsala: Scandinavian Institute of African Studies.

資料. 『メネン皇后学校料理書』掲載レシピ一覧 (Ethiopian Recipes において、豆類を主体とするレシピに網掛けを施し、名称に「アリチャ」を含むレシピに下線を付した)

**Ethiopian Recipes** “Lemlem Zigen”, p. 11 / Lentil Wat I (Fasting), pp. 11–12 / Lentil Wat II, pp. 12–13 / “Minchet Abesh” I, p. 13 / “Minchet Abesh” II, pp. 13–14 / “Metin Shero”, pp. 14–15 / Meat Wat I, pp. 15–16 / Meat Wat II, pp. 16–17 / Meat Wat III, p. 17 / Meat Wat IV, pp. 17–18 / Meat Wat V, pp. 18–19 / Sufe (Fasting), p. 19 / “Sik-Sik” Wat, pp. 19–20 / Pea Flour Fish I (Fasting), pp. 20–21 / Pea Flour Fish II (Fasting), p. 21 / Barley Flour “Beso”, pp. 21–22 / Split Pea Wat with Flax (Fasting), p. 22 / “White Shero”, p. 23 / Wheat Bread II (“Ambasha”), pp. 23–24 / “Abesh”, p. 24 / “Awaze”, p. 25 / Red Pepper Soup, pp. 25–26 / Lentil Alecha (“Azefa”), p. 26 / “Afrenge”, p. 27 / “Enfillet” Leg of Lamb, pp. 27–28 / Pea Flour “Infurur” I (Fasting), p. 28 / Pea Flour “Infurur” II (Fasting), pp. 28–29 / Pea Flour “Infurur” III (Fasting), p. 29 / Split Pea Wat I, pp. 29–30 / Split Pea Wat II, p. 30 / Split Pea Wat III, pp. 30–31 / Split Pea Wat IV (Fasting), pp. 31–32 / Split Pea Wat V (Fasting), p. 32 / Split Pea Wat VI (Fasting), p. 33 / Split Pea Wat VII (Fasting), pp. 33–34 / Split Pea Wat VIII (Fasting), p. 34 / Split Pea Wat IX (Fasting), p. 35 / Split Pea Wat X (Fasting), p. 35 / Split Pea Wat XI (Fasting), p. 36 / Split Pea Wat XII (Fasting), p. 36 / “Wechet Abesh” (Fasting), p. 37 / “Zigen” Wat, p. 37 / Meat Alecha I, p. 38 / Meat Alecha II, pp. 38–39 / Meat Alecha III, pp. 39–40 / Meat Alecha IV, p. 40 / Coarse Wheat Flour Porridge, p. 41 / Barley Porridge, pp. 41–42 / Pea Flour Alecha I (Fasting), p. 42 / Pea Flour Alecha II (Fasting), pp. 42–43 / Pea Flour Bread I (Fasting), p. 43 / Pea Flour Bread II (Fasting), pp. 43–44 / How to Purify Butter, p. 44 / How to Prepare Red Pepper, pp. 45–46 / Coarse Corn Flour Porridge, p. 46 / Dried Meat II, p. 47 / Alecha Spices, p. 47 / Roasting Fish (Fasting), pp. 47–48 / Whole Pea Alecha (Fasting), p. 48 / Vegetable Alecha (Fasting), p. 49 / Cereal Butter, p. 50 / Omelet, p. 50 / Split Pea Alecha I (Fasting), p. 51 / Split Pea Alecha II (Fasting), p. 51 / Split Pea Alecha III (Fasting), pp. 51–52 / Wat Spices, p. 52 / Potato Alecha I (Fasting), p. 53 / Potato Alecha II (Fasting), p. 54 / Chicken Alecha, pp. 54–55 / Teff Engera, pp. 55–56 / Fasting Pea Flour Eggs and Wat (Fasting), pp. 56–57 / Pea Flour Eggs (Fasting), p. 57 / Fasting Egg Wat (Fasting), p. 58 / Small Roasted Bread, pp. 58–59 / Potato Wat (Fasting), p. 59 / Fried Potatoes (Fasting), pp. 59–60 / Wheat Bread I (“Duffu Dabbo”), p. 60 / Preparation of Chickens for Use in Cooking, pp. 60–62 / Chicken Wat I, p. 62 / Chicken Wat II, p. 63 / Chicken Wat III, pp. 63–64 / Chicken Bread, pp. 64–65 / “Gibit Meser” (Fasting), pp. 65–66 / Beer (Talla), pp. 66–67 / Hydromel (Tetj) p. 67 / “Chickoa”, pp. 67–68 / “Qualeema”, pp. 68–69 / Dried Meat I, p. 69

**European Recipes** Almond Cake with Chocolate Icing, p. 74 / Almond Tarts, pp. 74–75 / Ambrosia Cake, pp. 75–76 / Anchovy Eye, p. 76 / Baked Bananas (Fasting), pp. 76–77 / Beans Scallop (Fasting), pp. 77–78 / Beef Tongue with Mushroom Sauce and Mashed Potatoes, p. 78 / Boiled “Aoot” with Fresh Bananas, pp. 78–79 / Boiled Mutton with Dill Sauce, p. 79 / Boiled Potatoes, p. 80 / Brandy Rings, p. 80 / Brown Sauce, pp. 80–81 / Browned Potatoes, p. 81 / Butter Leaves, pp. 81–82 / Caramel Pudding, pp. 82–83 / Chocolate Cake, pp. 83–84 / Chocolate Cookies, pp. 84–85 / Chocolate Icing, pp. 85–86 / “Cigarettes”, p. 86 / Cinnamon Cookies, pp. 86–87 / Coconut Cookies, p. 87 / Coffee Bread, p. 88 / Coffee Fingers, p. 89 / Dill Sauce, pp. 89–90 / Dream Cookies, pp. 90–91 / French Dressing for Salads (Fasting), p. 91 / Fried Chicken, pp. 91–92 / Fruit Pie with Vanilla Sauce, pp. 92–93 / Fruit Salad, p. 93 / Fudge Cookies (Fasting), p. 94 / Ginger Cake, pp. 94–95 / Ginger Snaps, pp. 95–96 / Half Moons, pp. 96–97 / Jelly Boll, p. 97 / Kidney Sauté, p. 98 / Lemon Cream with Oranges or Peaches, pp. 98–99 / Mashed Potatoes, p. 99 / Mayonnaise, p. 100 / Mixed Green Salad, pp. 100–101 / Mushroom Sauce, pp. 101–102 / Mutton Chops, pp. 102–103 / Oat Wafers, p. 103 / Orange Marmelade, pp. 103–104 / Pineapple Fromage, pp. 104–105 / Potato Salad, pp. 105–106 / Quick Cocoa Frosting (Fasting), p. 106 / Rice Porridge, pp. 106–107 / Roast Beef, p. 107 / Roast Leg of Lamb, p. 108 / Rolled Oat Cookies with Date Filling (Fasting), pp. 109–110 / Rye Bread, pp. 110–111 / Rye Cookies, p. 111 / Sandwiches, pp. 111–112 / Sardines au Gratin (Fasting), p. 113 / Sautéed Fish, pp. 113–114 / Scones, p. 114 / Scotch Short Bread, pp. 114–115 / Small Meatballs, pp. 115–116 / Sponge Cake, p. 116 / Spritz Rings, pp. 116–117 / Stuffed Baked Tomatoes (Fasting), p. 117 / Swedish Pancakes, p. 118 / Sweet Balls (Fasting), p. 118 / Tarts with Filing, p. 119 / Tomato Salad (Fasting), pp. 119–120 / Tomato Soup, pp. 120–121 / Torte with Vanilla Cream Filling, p. 121 / Vanilla Ice Cream, p. 123 / Chocolate Ice Cream, p. 123 / Vanilla Sauce, p. 123 / Vegetables with Mayonnaise, p. 124 / Vegetable Soufflé, p. 124 / Vegetable Soup, p. 125 / White Dreams (Fasting), p. 126 / Whole Fried Onions, pp. 126–127



エチオピア西南部アリ地域における気鳴楽器と演奏集団  
田中綾華（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

**The Aerophone and Music Performance Group among the Aari, Southwestern Ethiopia**  
**Ayaka Tanaka (Kyoto University)**

本発表の目的は、2022年10月に実施した予備調査をもとに、エチオピア西南部高地に暮らすアリの人が演奏するタケ製気鳴楽器オイサ (*woysa*) の特性とその演奏集団や活動の特徴をあきらかにすることである。発表者は、エチオピア西南部にある標高約2000mに位置するP村にて、2022年10月から12月まで45日間の予備調査を実施した。

予備調査の結果、オイサの特性として以下の点が明らかになった。(1) P村では、オイサは6本1組の気鳴楽器の総称であった。聞き取りによれば、地域によって1組の本数が異なっていた。(2) オイサは、タケ製で指孔がなく、歌口がひとつのみという形状をしている(息を吹き込む穴と音が出る穴が同じ)。(3) 1本の管からひとつの音のみが発せられる。(4) P村では、6人1組になって楽曲を演奏する。(5) P村では、*maaka* (マーカ) と呼ばれる品種のタケを使って、奏者がオイサを製作していた。(6) 新しく1組のオイサを製作する場合、1本のタケから6本の管を切り出す。(7) 紛失、破損などの原因で既存のオイサ1組に管を補充する場合、他のタケを用いて管を製作する。(8) 新しく1組のオイサを製作する場合、音程調整は2名の奏者によっておこなわれる。このとき、基準として音叉などの音高を確認する道具や、既存のオイサが用いられることはなかった。(9) 既存のオイサ1組に管を補充する際には、その1組の中から隣り合う音高の管の音を基準として、補充する管と既存の管の音程調整をおこなう。(10) P村の集団が演奏する楽曲は8種類あった。

オイサという気鳴楽器を使った演奏は、P村の日常的な活動や冠婚葬祭の場面だけではなく、2010年代にはいつてからは、郡や県の文化的なイベントなどで実施されるようになってきた。このような背景のもと、P村の演奏集団やその活動については、予備調査において、以下のような特徴が見出された。

(1) 南アリ郡では、各カバレに対して音楽演奏集団を組織することを依頼し、P村では2021年から音楽演奏集団が発足した。(2) 調査時点で、この集団に所属する人のうちオイサ演奏にかかわる人は28名、そのうちオイサの奏者は20名であった。(3) オイサ奏者はすべて男性であった。女性参加者8名はすべてダンサーであった。(4) 彼らの活動はおもに2つあり、1つ目が祝祭日や行政が主催するイベントなどでオイサの演奏をおこなうこと、2つ目は *eefi* (エーフィ) と呼ばれる葬送儀礼をおこなうことであった。(5) 調査中にこの集団は、*Dishita Gina* (デシタゲナ) と呼ばれる新年を祝うイベントにおいてP村、南アリ郡のイベントに招聘されて演奏をおこなっていた。(6) 調査中、南アリ郡の文化・観光部の依頼で、P村の音楽演奏集団がドキュメンタリー撮影のためにオイサ演奏と *eefi* をおこなった。アリの音楽や文化を地域外の人に向けて発信する活動にも従事していた。

今回の予備調査では、これまでP村で実践されてきたオイサを中心とした音楽演奏が、行政主導で組織化され、村を離れた場面で注目されるようになってきている状況があきらかになった。演奏場面の動画撮影、演奏の録音、さらにはインターネットを介してSNS等でそれらのデジタルデータを演奏集団所属者自身が発信できる環境にあることも含めて、オイサを中心とした音楽演奏やその組織は、これまでとは異なる文化、社会、政治的状況に置かれている。今後予定している本調査では、参与観察を介してオイサの演奏技術を学びながら、前述した状況下におけるオイサ演奏技術の習得過程や、P村を事例としてエチオピアにおけるコミュニティの音楽実践について検討したい。

映画上映  
『吟遊詩人―声の饗宴―』  
川瀬慈 (国立民族学博物館)

Film Screening  
**Bards: A Banquet of Voices**  
Itsushi Kawase (National Museum of Ethnology)

17分／2022年制作

撮影・録音・編集・監督：川瀬 慈

使用言語：アムハラ語（日本語字幕）

撮影場所：Duka Masingo、アジスアベバ エチオピア連邦民主共和国

エチオピア連邦民主共和国の都市にみうけられる酒場“アズマリベット”。ここでは楽師アズマリが弦楽器マシニコを弾き語り、人生の無常や恋愛、社会批判等を歌にし、庶民を楽しませる。アズマリのパフォーマンスの特色は歌い手のみならず、聴き手も即興的に詩を生み出し、歌い手に投げかけていくことにある。アズマリはそれらの詩を弦楽器の旋律にのせて一字一句復唱し、聴衆に聴かせる。本作は、2022年6月6日、アジスアベバのハヤフレット地区にあるアズマリベット Duka Masingo において、長回しのシングルショットによって記録された、ゴンダール出身のアズマリ、ソロモン・アイヤノー氏と客たちの詩のやりとりである。ここで歌われた詩のテーマは、新型コロナウイルスの世界的な蔓延、ティグライ人民解放戦線 (TPLF) と政府軍による戦争、過去と現在のエチオピア首相に対する批判、さらには大エチオピア・ルネサンスダム (GERD)建設をめぐるエジプトやスーダンとの外交摩擦に至るまで多岐にわたった。アズマリベットの歌は、エチオピアをめぐる社会情勢や庶民の気持ちを映し出す鏡である。

## **Tracing the Original Urbanscape of Addis Ababa: Case of Armenian Sefer**

**Rumi Okazaki, Ikuro Shimizu, Eisuke Shoji, Kentaro Nishiyama, Kei Misumi, Taiga Takehara**

**(Shibaura Institute of Technology)**

**Tadesse Girmay, Fasil Giorghis**

**(Addis Ababa University)**

This study focuses on the Armenian Sefer, one of the oldest neighborhoods in Addis Ababa, as a case study to trace the city's evolution from a military camp to a modern city. The Armenian Sefer is located south of the former Haile Selassie I palace grounds, the current Addis Ababa University's main campus in Sidist Kilo. The name of the sefer comes from the fact that many Armenians settled there. One reason for their settlement was its proximity to Arada, the primary market of Addis Ababa. Most Armenians were engaged in trade, while some were working in the old palace of Menelik, also close by. Other people, such as high-rank nobilities, military officials, experts, and clergymen closely related to the emperor, were given land in this neighborhood for their services and built their homes. According to a heritage database made in 2006, at least 62 heritage houses were found in this area. Although these buildings have deteriorated and require repair, their topological location and architectural spatial organization give us a glance at the majesty of the past. Later, some buildings were passed on to their descendants, and others were converted into kebele housings and office buildings.

The research team tried to unravel the original streets and blocks by collecting and analyzing old maps and conducting interviews. Heritage houses and descendants of original residents, stone pavements, and aged trees have given us clues to find urban traces of the past. Furthermore, by breaking down and analyzing the current neighborhood into its various layers, we tried to extract its unique urban characteristics and reasons behind the livelihood.

エチオピア都市における宗教空間の力学に関する一考察  
—ジンマ市の事例から—  
石原美奈子（南山大学）

**A Preliminary Study on Dynamics of Religious Space in Urban Ethiopia:  
A Case Study of Jimma City  
Minako Ishihara (Nanzan University)**

ここでいう宗教空間とは、宗教的活動を主として行う空間（教会／モスク、修道院／修行所、墓地）をさす。都市という世俗空間において、これら宗教空間がどのように地理的に配置されるのかは、「縄張り意識（territoriality）」の問題とも関連し、それは信者の日常生活の景観の構成に大きな影響を与える（Stump 2008）。本発表において注目するのはこの「縄張り意識」である。ある場所に教会／モスクを建てることは、その空間を特定の宗教（信者集団）が占有することになる。エチオピアにおいて宗教は政治経済と不可分の関係にある（石原 2014）。宗教空間の地理的な配置が、どのようになされ、維持され、変化してきたのか。宗教空間の配置と時間的変化を「縄張り意識」の観点から考察することが本発表の目的である。

オロミア州ジンマ県ジンマ市は、エチオピア南西部最大の都市である。19世紀に栄えたジンマ王国の政治的中心地であり、市の北東に聳える丘陵の頂上に位置するジレンに宮殿が築かれた。二階建ての宮殿の上階の窓からは四方が見渡せるようになっており、戦略的にも優れた位置にあった。ジンマ王国は、アッバ・ジファール1世の時に、ゴンダール出身のシャイフ・アブドゥルハキームによってイスラームが導入され、他の「ギベ5王国（19世紀にギベ川源流域にたてられた5王国）」同様、イスラーム王国として発展した。とくに最後の王となったアッバ・ジファール2世（1932年没）は敬虔深いムスリムであったとされ、各地からイスラーム学者を招聘するなどジンマ王国の「イスラーム化」を推進した。19世紀末にエチオピア帝国に征服された後も、多額の納税を条件に王国の自治権を認められ、それはアッバ・ジファール2世の死まで続いた（Lewis 2001）。

筆者は、1992年からジンマ県で調査を行っているが、ジンマ市は通過点であり、調査地ではなかった。今回改めてジンマ市を調査してみようと思ったのはGoogle Earthでジンマ市を眺めていた時、奇妙な事実に気づいたからである。市内いくつかあるエチオピア正教の教会が、どういうわけか、二つずつ近接した場所に建てられていた。似たような事例を他地域で探したが見つからなかった。ムスリム・オロモがマジョリティーを占める社会においてエチオピア正教会信徒・（主として）アムハラは、肩身の狭い思いをして暮らしていたことは想像に難くない。イスラーム優位の社会におけるキリスト教的宗教空間はどのように配置・維持されたのか考察を行った。本発表は、科研費基盤研究（B）「エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通じた多元的歴史認識の解明」（研究代表者：石原美奈子）の一環として2022年8月に行った現地調査がもとになっている。

石原美奈子(2014)『せめぎあう宗教と国家』風響社

Lewis, Herbert (2001) *Jimma Abba Jifar, An Oromo Monarchy, Ethiopia 1830-1932*, Lawrenceville: RSP.

Stump, Roger W. (2008) *The Geography of Religion, Faith, Place, and Space*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

第32回日本ナイル・エチオピア学会学術大会大会事務局：宮脇幸生（委員長）

大会事務局連絡先：〒599-8531大阪府堺市中区学園町1-1

大阪公立大学現代システム科学研究科

事務局専用メールアドレス：[32nd.janes@gmail.com](mailto:32nd.janes@gmail.com)

Secretariat of the 32nd Annual Conference for JANES

Yukio Miyawaki,

c/o Graduate School of Sustainable System Sciences, Osaka Metropolitan University

Gakuen-cho 1-1, Naka-ku, Sakai-city, Osaka.

Email: [32nd.janes@gmail.com](mailto:32nd.janes@gmail.com)

